

畑井新喜司と若き研究者たちの楽園での日々 ーパラオ熱帯生物学研究所関係史料よりー

パラオ熱帯生物研究所は、太平洋学術協会の委員であった東北帝国大学教授の畑井新喜司（はたい しんきし 1876～1963）の熱心な提案で、日本学術振興会が珊瑚礁生物学の研究を主要な目的として設立、経営した組織でした。研究所は当時日本委任統治領であったミクロネシアの西カロリン群島パラオ諸島のコロール島アラバケツ部落附近にあり、1934年6月に設置されています。その後、海軍はマカッサル（セレベス島）に海軍総合研究所を設置することとし、本研究所も移して環境科学部へと再編され、1943年3月に廃止されました。その活動期間は約10年と短かったものの、研究所の発行した欧文誌 Palao Tropical Biological Station Studies と邦文誌「科学南洋」により、研究成果は世界に発信されていました。

研究所の構成員は主に大学院生や無給副手の若い研究者たちで、学振から研究費を支給され、半年から長くて5年ほど各々研究に従事していました。帰国した研究員の発案で1938年に『岩山会』を結成し、戦後も青春時代の楽園での日々を振り返る会報を出しています。

本資料には、パラオと周辺諸島の詳細な地図やパラオ熱帯生物研究所を往来する人々の記録、日本の占領下にあったパラオでの研究所運営の実態、現地生活の記録などが含まれています。また研究員の元田茂（もとだ しげる 1908～1995 後に北海道大学農学部教授）が当時研究のために使用したノートも遺されており、初期の熱帯生物学研究が如何に行われたかを知る上でも価値のある史料といえます。



元田茂発案の研究所のロゴマーク